

くらしを支える願いと祈り

仙人さまの話

足の不自由な人でね、何とかそれを治そうと思って、家の裏山さね、観音様つつ神様あったのさ、毎晩ね、すっかり 12 時過ぎてから真夜中に、21 日通ったんだって。そして、21 日になるという 2、3 日前にね、その坂の細道通っていったら、行く途中さ大っきなウシが寝てだんだってよ。どうも、除けようなかったんだって。そこ、除けようないから、ウシをウンチモンチ上がっていったけんとも、ウシはその人さ別に悪戯しなかったっていうんだね。そして、もはや、観音様さ着くっていった瞬間に、大っきな鉄の棒持った鬼がね、いたんだって。他に行きようがないから、その鬼の足さすがって、鬼のマツタ(股)を潜って観音様さお参りに行ったんだって。

そして、最後の晩、明日で 21 日だという晩にね、観音様に「明日はオマエ、来ねだっていいよ」って言われたんだって。「どうして？」って聞いたら、「明日の晩には俺の方がオマエの家さ行くんだぞ。ふんで、オマエと俺が真剣に勝負するから、オマエ死ぬか俺が殺されっか二つに一つの命だから、今晚、皆さ語っておけよ」と言われて皆さ話、したんだべけんともね、家の人たちも誰一人、その真剣に勝負したの知らねって。

うんと気合かけてね、長い十字槍持って格闘したんだけんとも、どうも相手の神様がスズメなんだって。どうも突かれようなかったんだって。ずいぶん天井まで疵ついたりまったりして、やったんだけんとも、「よし、疲れたようだから、このへんで止めよう」って言ってね、「オマエの家では誰一人気づいてね」って、神様に言われたんだって。「ふんで、こんな馬鹿な話あつかという人が多いから、この槍をオマエに上げるから」って十字槍もらったんだって。その人(仙人様)は「この槍は何十年たったって、何百年たったって磨いてはならんぞ」と、こういう口止めして亡くなったそうだよ。

(『升沢にくらす』 p.242-3)

文字を教える仙人さま

家族が大勢でご飯を食べてたとき、神じん棚に、何かカラカランと金鳴りしたんだって。仙人様が「あっ、神のお使い来るな」って、こう言ったんだって。そしたっけお膳の上さ封筒降ってきたんだって。「何が書かってきたんだろうな」って、そしてシャデ(弟)と二人で見たんだって。「何だ。神様だって、もう少しわかるように書いてけたらいいべ。さっぱりミミズでも這ったような、わかんねえ字だな、こいつは。回答なんねえ字だな」と言って、その封筒を見て、お膳の上さ上げて、ご飯食べた。

そしたら、また手紙来た。それはお咎めの手紙だった。「失礼な。神の書いたものさ、ミミズ這ったような字だなんて、そんな失礼なこと、あるもんでねえ」って、それだけの 2 回目のお咎めだったんだって。

(『升沢にくらす』 p.243)